Journal of Hyogo University of Health Sciences. Vol. 9, No. 2, pp.79-83, 2021

実践報告

患者講師による招聘授業動画を活用した オンライン演習の取り組み

森明子、佐久間香、永井宏達、宮本俊朗
兵庫医療大学リハビリテーション学部

Online Practice Using Videos of Lectures by People with History of Diseases

Akiko MORI, Kaoru SAKUMA, Koutatsu NAGAI, Toshiaki MIYAMOTO
School of Rehabilitation, Hyogo University of Health Sciences

抄　録

我々は毎年、実際の患者を大学の授業に招聘し、患者講師による講義や実技体験を盛り込んだ学内教育を実践している。しかし、2020年度はCOVID-19の影響により対面での招聘授業を断念せざるを得ない状況であった。そこで今回、過去の招聘授業の様子を記録した動画を活用したオンラインでの新たな演習方法を試み、その学習実態についてアンケート調査を実施し、検証した。対象科目は2020年度に開講された神経系理学療法学実習ならびに神経系理学療法学Ⅱとし、リハビリテーション学部理学療法学科3年生45名、および同学部同学科2年生45名を対象とした。アンケート回収率は3年生27名（60%）、2年生16名（36%）であった。アンケート結果から、過去の招聘授業の様子を記録した動画を用いたオンライン演習は、教材資料となる動画の質や教員からのフィードバックのタイミングを改善することで、一定の教育の質や学生の満足度を担保できる可能性が示唆された。

キーワード：患者講師、オンライン演習、神経系理学療法

Ⅰ　はじめに

2020年1月14日、WHO（World Health Organization）により世界で初めて新型コロナウィルス（以下、COVID-19）が確認されたと発表があった。同月16日には日本国内初となる感染が確認され、その後、瞬く間に世界中へ感染拡大となった。日本では小学校・中学校・高等学校をはじめとする教育機関への臨時休校要請が2月27日に出され、日本中が混乱したこともまだ記憶に新しい。この臨時休校要請以降、COVID-19の影響による柔軟な授業形態や教育方法の転換を余儀なくされ、新しい手法での教育方法の模索が始まった。

我々は毎年、実際の患者を大学の授業に招聘し、患者講師による講義や実技体験を盛り込んだ学内教育を実践している（図1、2、3）。患者を目の前にした時に感じる緊張感や臨場感を経験し、少しでも臨床場面を想定した授業を理学療法学教育課程内に盛り込み、実際の患者イメージを掴んでもらうことを目的としている。

受付日：2021年7月20日　　受理日：2021年11月2日
別冊請求先：森明子　〒650-8530　神戸市中央区港島1-3-6　兵庫医療大学　リハビリテーション学部

コロナ禍において、様々なオンライン授業の取り組みが実施されている。座学が中心の科目は予め講義内容を動画にて記録し、オンデマンド配信することによって多くの授業が展開可能である。しかし、実技や演習を中心とした科目はオンデマンド配信することは教育目標の達成が叶わないことが多く、何らかの工夫が必要となる。2020年度における患者講師による対面での招聘授業はCOVID-19感染リスクを鑑み、見送らざるを得ない状況となった。しかし、招聘授業は、学生にとって大きな経験になることから例年実施している本授業を全く実施しないという選択肢は、学生にとっての学習機会の損失になると考えられた。そこで、記録用に撮影した映像ではあるが、過去に行った招聘授業時の動画を活用した授業を試みることとした。今回、我々は患者講師の協力を得て、過去の招聘授業の様子を記録した動画を用いた新たな演習方法を行い、その学習実態についてアンケート調査を実施し、一定の見解が得られたため報告する。

Ⅱ　方法

1.　対象科目と対象者

1）対象科目

対象科目は2020年度に開講された神経系理学療法学実習（授業頻度：週1回2コマ（1コマ＝90分）、総回数30回）ならびに神経系理学療法学Ⅱ（授業頻度：週1回2コマ、総回数16回）とした。神経系理学療法学実習はリハビリテーション学部理学療法学科3年次前期、神経系理学療法学Ⅱは同学部学科の2年次後期後半に配置されている。神経系理学療法学実習では脳卒中患者、神経系理学療法学Ⅱでは頚髄損傷患者を毎年招聘し、2コマ分の授業をご担当いただいている。これらの授業科目は中枢神経疾患、脊髄疾患、神経筋疾患、脳疾患そして末梢神経系疾患の障害像を理解し、神経系障害に対する理学療法を実践するために必要な知識と技術を身につけることを教育目標としている。

2）対象者

対象者は神経系理学療法学実習を履修していた2018年入学学生（以下、3年生）リハビリテーション学部理学療法学科45名、および神経系理学療法学Ⅱを履修していた2019年入学学生（以下、2年生）45名とした。アンケート調査の対象となる参加した学生は、それまでの臨床実習はほぼ見学のみで、臨床実習経験が乏しかった。

2.　授業実施方法

COVID-19感染拡大防止のため、例年実施している対面での招聘授業の実施が困難であった。そのため、

図1.　問診（神経系理学療法学Ⅱ）

図2.　腱反射（神経系理学療法学Ⅱ）

図3.　歩行評価（神経系理学療法学実習）

図4.　リアルタイムオンラインによる医療面接（神経系理学療法学Ⅰ）

その代替え手段として、過去に行った招聘授業の動画を活用した授業を実施した。それら招聘授業は1週間に2コマを3週間にわたり実施し、グループディスカッションでは予め学生をグループ分けしたMoodleのチャット機能を用いてリアルタイムオンラインで行った。過去の招聘授業動画は、医療を受ける立場からそれまでの体験を通じて感じたことなどを患者講師に話していただき、その後、学生は患者講師に対し理学療法評価の実技を実施している動画内容であった。オンライン演習内における学生への課題は、患者講師に対して実施している理学療法評価に関する動画を視聴し、動画中の学生が実施する評価の実施や方法の良かった点・改善が必要な点を考えること、推測される評価結果をまとめること、評価結果から考えられる症例の問題点の抽出、理学療法プログラムの立案を行い、最後には内容をまとめた発表動画を完成させることであった。なお、後期科目である神経系理学療法学Ⅱでは過去の招聘授業の動画の視聴が中心となったが、関連科目である神経系理学療法学Ⅰの授業内においてリアルタイムオンラインで患者講師と繋ぎ、オンライン上にて医療面接を実施した（図4）。

3. アンケート項目と実施方法

過去の招聘授業の動画を活用した講義終了後、学生に対するアンケート調査を実施した。

回答項目は最大7項目とし、Moodleのアンケート機能を用いて行った。調査期間は3年生が2021年1月6日～1月11日、2年生は2021年1月6日～1月25日であった。アンケートは無記名式とし、アンケートは「そう思う」「ややそう思う」のポジティブな意見、「あまりそう思わない」「そう思わない」のネガティブな意見、「どちらでもない」の5段階評価で実施し、3年生、2年生より得られた結果をまとめた。なお、本アンケート調査は、結果の一部を本学で開催される2020年度FD/SDワークショップの実践報告、ならびに各種報告書にて公開する可能性があることを伝えた上で行った。アンケートを回答するにあたり、個人が特定できるような形での発表は一切ないこと、また、アンケートの特性上、回答後にアンケートを撤回することができないため、アンケートの回答を持って趣旨に同意したものとすることを表記した上で実施した。

Ⅲ　結果

アンケート回収率は3年生27名（60％）、2年生16名（36％）であった。各アンケート項目の結果を以下に示す。「患者講師による招聘授業を記録した過去の授業動画を活用した授業の取り組みは良かったか」の質問に対し、両学年とも、ポジティブな意見は3年生45％（12名）、2年生32％（5名）、ネガティブな意見は3年生37％（10名）、2年生25％（4名）、普通（3年生19％（5名）、2年生44％（7名））に分かれる結果となった（表1）。今回の招聘授業が有益であると思った理由として、両学年とも「講義（録画）動画を繰り返し視聴が出来る」が最上位にあげられた（図5）。一方、今回の招聘授業が有益ではなかった理由の最上位の理由は、3年生では「対象者に直接触れられない」が80％（8名）であったのに対し、2年生では同項目に不満であった理由をあげる者がいなかった点が特徴的であった（図6）。「過去の動画を視聴し、各評価の実施方法を見て学ぶことができたか」の質問項目では3年生の60％（16名）がポジティブな意見であった（表2）。また、3年生にのみ設定していた質問項目である「2年生後期で実際に経験した脊髄損傷患者さんの招聘授業と比較し、今回、過去の映像で実施した招聘授業は何％程度の満足度だったか（同じくらいの満足度

表1.　アンケート結果：過去の招聘授業動画を活用した取り組み
質問1.　過去の招聘授業を活用し、視聴する取り組みは良かったと思いますか。

	3年生		2年生	
	（%）	（名）	（%）	（名）
そう思う	4	1	13	2
まあそう思う	41	11	19	3
普通	19	5	44	7
あまりそう思わない	33	9	25	4
そう思わない	4	1	0	0

表2.　アンケート結果：評価方法に対する学び
質問4.　過去の動画を視聴し、各評価の実施方法を見て学ぶことができましたか。

	3年生		2年生	
	（%）	（名）	（%）	（名）
そう思う	4	1	0	0
まあそう思う	56	15	38	6
普通	19	5	50	8
あまりそう思わない	22	6	13	2
そう思わない	4	1	0	0

であった場合を100とする)」の結果は平均65点であった。一方、2年生にのみ設定していた質問項目である「過去の映像で実施した招聘授業は何％程度の満足度でしたか（普通を50％とする)」の結果は平均58点であった。「次年度、コロナの影響で対面での招聘授業が叶わなかった場合、どのような代替え方法で実施するとより有益と思うか」について尋ねたところ、3年生からは「過去の動画を見る方法でよい（17名)」に加え、「Zoomなどリアルタイムオンラインを用いて工夫（6名)」、「視聴している動画に関するフィードバック（6名)」などの意見があげられた。2年生からは「過去の動画を見る方法でよい（10名)」の意見が主にあげられた。

Ⅳ　考察

1.　教材資料動画について

患者講師による招聘授業を記録した過去の授業動画を活用した授業はポジティブな意見とネガティブな意見に分かれた。これは授業動画を繰り返し視聴できることや、自分（グループ）のペースで学習を進められるなどのメリットがある一方､実際の対象者に対面し、直接触れることが出来ず臨場感や緊張感を経験できない点がネガティブな意見の理由として3年生からあげられた。2年生からは直接対象者に触れられない点に不満を感じていない結果が示された。これは、対面による招聘授業の経験がないため、本来経験する臨床場面に近い緊張感をイメージできていない可能性が考えられた。また、今回使用した過去の動画は記録用として残していたものであり、予め視聴覚資料として活用することを目的とせず撮影していたため、音声の聞き取りづらさや、評価者の手元が見えづらいなどの問題も明らかとなった。しかし、動画を活用した授業実施方法は一定のメリットがあるため、視聴覚資料として整ったものであれば、さらに効果のある授業資料になると考えられた。

2.　学年間における招聘授業の受け止め方の違い

2年生後期で実際に経験した招聘授業と比較し3年生の今回の授業の満足度は平均65点であった。対面で行う患者講師による招聘授業は、教科書からはイメージしづらい患者の生活場面や動作の観察・分析をリアルに経験することができ、理学療法士を目指す学生にとって、日々の学びへのモチベーションへ繋がっている[1)]。過去に一度、対面での招聘授業での学びを経験している3年生にとって過去の招聘授業動画を活用した内容では、物足りなさがあったことは否めなかった。一方、2年生における今回の授業内容に関する満足度（普通を50点とする）は平均58点であった。これは対面での招聘授業の経験がないため患者講師による授業イメージがリアルに感じづらく、可もなく不可もなくというジャッジであったと思われた。3年生、2年生の受け止め方の違いを総合的に考えると、対面での招聘授業の経験を重ねることは、これまで学内で

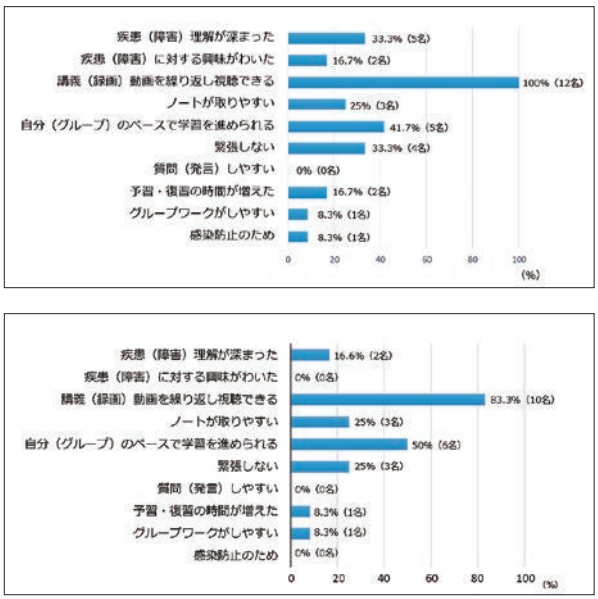

図5.　過去の招聘授業動画の活用が有益であると思った理由（質問2：上段3年生、下段2年生回答）

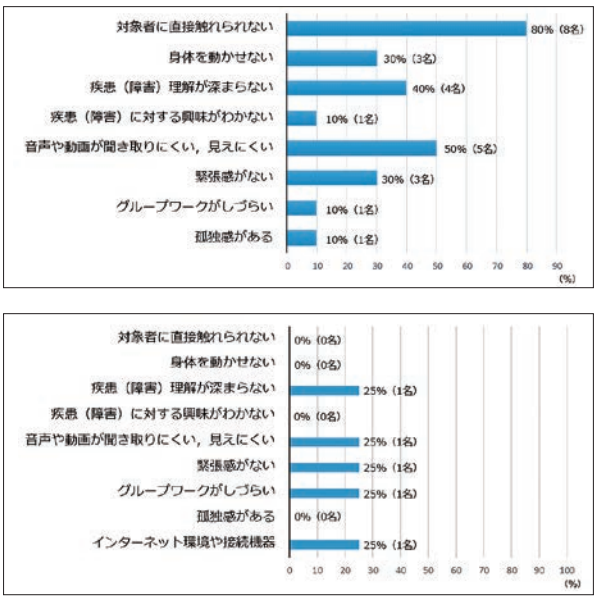

図6.　過去の招聘授業動画の活用が有益でないと思った理由（質問3：上段3年生、下段2年生回答）

学んだことを活かし、理学療法評価を実施することにより、現時点で学生自身が身につけた実技の実施力を振り返ることが出来、大変貴重な機会となっているものと考えられた。

V　まとめ

今回、我々はCOVID-19の影響により患者講師による対面での招聘授業を断念し、過去の招聘授業の様子を記録した動画を用いたオンライン演習を行った。学生から得られたアンケート結果より、教材資料となる動画の質や教員からのフィードバックのタイミングを改善することで、一定の教育の質や学生の満足度を担保できるのではないかと考えられる。平時では、2年次後期で頚髄損傷患者、3年次前期で脳卒中患者の患者講師を招聘している。異なった疾患を有する患者講師による招聘授業の反復実施は、疾患を越えた基本的な理学療法の修得に繋がり、より臨床場面を想定した実践的な理学療法学教育が展開できる。今後は、コロナ禍で新たに得られた教育方法のメリットも加味しながら、より工夫した内容に改善していきたいと考える。

文献

1）森明子：患者講師による招聘授業の反復実施が及ぼす教育的効果について．医療71(12), p494-498, 2017.